

# R

KANSAI  
UNIVERSITY  
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed

# eed

No. 58

September, 2019

関西大学ニュースレター

発行日：2019年(令和元年)9月18日

発行行：関西大学 総合企画室広報課

大阪府吹田市山手町3-3-35

〒564-8680 TEL.06-6368-1121

<http://www.kansai-u.ac.jp/>

■特集 世界文化遺産「百舌鳥・古市古墳群」と関西大学

## 大阪初の世界文化遺産登録につながった 長年にわたる学術研究の積み重ね

# 長年にわたる学術研究の積み重ね

●世界文化遺産「百舌鳥・古市古墳群」と関西大学

大阪初の世界文化遺産登録につながった



## Special Issue : Mozu-Furuichi Kofun Group Ancient Tumulus Clusters

### ●座談会

**徳田 誠志** ●宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査官

**十河 良和** ●堺市文化観光局世界文化遺産推進室主幹

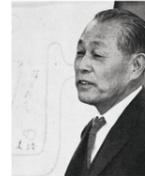
**米田 文孝** ●関西大学文学部教授・博物館長

**井上 主税** ●関西大学文学部准教授

7月6日、アゼルバイジャンで開催されたユネスコ(国連教育科学文化機関)の世界遺産委員会において、百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録が決定された。

現在の大阪府堺市の百舌鳥、羽曳野市と藤井寺市の古市の2つのエリアに、4世紀後半～5世紀代に築造された百舌鳥・古市古墳群は、巨大な陵墓をはじめ、さまざまな大きさや形状の古墳によって構成されている。

百舌鳥・古市古墳群の調査研究は、1950年頃から、近隣の大学の考古学担当教員や学生により本格的に着手され、関西大学では末永雅雄文学部教授(のちに名誉教授)の指導のもと学生も参加し、以降、関西大学文学部考古学研究室が関わってきた。



末永雅雄 名誉教授

今回は、その考古学研究室の出身者であり、世界文化遺産登録にも長年携わってきた、宮内庁書陵部陵墓課の徳田誠志陵墓調査官、堺市文化観光局世界文化遺産推進室の十河良和主幹を招き、関西大学米田文孝文学部教授・博物館長、井上主税文学部准教授とともに、世界文化遺産登録までの苦心や今後の展望から、考古学研究室での懐かしい学びの思い出を語り合った。併せて、7月に大阪・東京で開催した特別シンポジウムもレポートする。

### ◆考古学研究室——それぞれの学びの出発点

**米田** 百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録はうれしいことですね。徳田さんと十河さんのお二人は、所属は異なりますが、今回の登録に向けて、長い間ご尽力されたと聞いております。今日は百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産としての、歴史的な価値、魅力、そして登録に至るご苦労話などお話しいただければと思っています。

まず、ここにいる4人は全員関西大学の出身ですが、それぞれの関係、お互いの思い出などについてお聞かせください。

**徳田** 私は関西大学で考古学の勉強をしたいと思い、1980年に入学しました。恐る恐る考古学研究室の扉を開けたところ、最初に対応してくださったのが米田先生でした。米田先生は確か大学院修士課程の2年次生だったと思います。十河さんは、私が大学院修士課程の2年次生の時に入学してきたと記憶しています。井上先生は1996年に古市古墳群にある仲哀天皇陵の調査をした時に、学生として手伝いに来てくれていたことを覚えています。

学生時代、米田先生、十河さんと私が関わった調査で思い出すのは、文学部の横田健一先生を代表とする「紀伊半島の文化史的研究」という調査で一緒にしたことです。

**十河** 私は1985年に関西大学に入学しました。考古学研究室には2年次生から加わりました。専攻する時代を決めかねていた私に、すでに同研究室に参加していた同級生が声をかけてくれました。

米田先生、徳田さんとの調査の思い出は、私もやはり「紀伊半島の文化史的研究」の一連の調査です。高校生の時に写真屋で撮影のアルバイトをしていたことを米田先生にお話したところ「その経験を生かして遺物の撮影をせよ」と指名されましたので、私は大きなカメラバッグと三脚を抱えて、何度も三重県の志摩地域へ通いました。

旅館や資料館の片隅で撮影をしていましたが、カメラごと遺物の上に倒れ落ちて悲鳴をあげる夢を見て、冷や汗をかいて目を覚ますことが何度もありました。それぐらい貴重な遺物を撮影させてもらう機会をいただきました。

それから、静岡県磐田市の茶畑で、米田先生にご指導いただいた横穴式石室の発掘調査のことははっきりと覚えています。「まずは学生同士で考えながら調査を進めよ」というのが先生の方針で、同級生ととことん議論しながら掘り進めていきました。今の仕事に必要な技術は、すべて考古学研究室で仕込んでもらったと思っています。

**井上** 私は1992年の入学で、この中では一番後輩です。学部生から大学院生にかけて、調査補助員として参加した古墳の発掘現場では、徳田さんにご指導いただきました。十河さんには学部の1年次生から研究会に誘っていただき、資料の見方や研究の基礎的な方法を教えていただきました。お二人に考古学の基礎を教えていただいたことを本当に感謝しています。

### ◆文化財に携わる仕事は幅広い

**米田** それぞれ現在の職場で、どのようなお仕事をされているのでしょうか。徳田さんは宮内庁書陵部陵墓課におられますが、普段のお仕事の内容についてお聞かせください。



■座談会

**徳田** 私の所属する書陵部陵墓課は皇居内にあり、主な業務は1都2府30県に899ある陵墓の調査研究及びその管理です。私は世界文化遺産となりました仁徳天皇陵をはじめ、古墳時代の陵墓の調査研究を担当しております。研究職として採用されましたが、宮内庁の一員ですから、今年のように御代替わりという大きな儀式がありますと、その関連業務も当然担当します。さらに、私のような年齢になりますと、国会対応などの対外的な業務もあります。

**米田** 十河さんは現在堺市文化観光局世界文化遺産推進室におられますが、そこでのお仕事や堺市文化財担当職員としてのお仕事についてお聞かせください。

**十河** 現在所属する世界文化遺産推進室は、世界文化遺産への登録推進と機運醸成を担当業務としてしています。私は学術担当として、ユネスコへ提出する推薦書の執筆や図版作成を担当するとともに、文化庁、宮内庁との連絡調整や協議に取り組んできました。その合間を縫って、講演会の講師や市役所内の関連部署との調整に従事してきました。世界文化遺産への登録が決定して、今は一安心しているところです。

以前に所属していた文化財課は、堺市内の埋蔵文化財、いわゆる遺跡の保護・活用や調査を担当しています。堺市内における開発工事の内容を把握し、埋蔵文化財が破壊される可能性がある場合は確認のための小規模な調査を行い、どうしても工事による破壊が避けられない場合は発掘調査を実施します。調査後は報告書を作成し、市民や研究者の皆さんに調査成果を公表します。堺市内の史跡の指定や保全・管理も業務の一環です。



**井上 主税 (いのうえ ちから)**  
関西大学文学部准教授。1972年大阪府生まれ。2000年関西大学大学院博士課程前期課程修了。07年大韓民国慶北大学大学院博士課程修了。奈良県立橿原考古学研究所主任研究員を経て、17年より現職。日本列島の古墳時代と同時代の朝鮮半島三国時代の墳墓や副葬品の比較研究、文物交渉史を専門に研究している。

後進を育成することが一番の責務だと思っています。文化財に携わる職場で活躍する卒業生を、一人でも多く輩出できるように頑張っています。



**十河 良和 (そごう よしかず)**  
堺市文化観光局世界文化遺産推進室主幹。1966年兵庫県生まれ。89年関西大学文学部史学地理学科卒。博士(文学)。90年堺市役所に入庁。埋蔵文化財の調査と保全に従事し、御廟山古墳、寺山南山古墳、銅亀山古墳などの発掘を担当。百舌鳥古墳群を中心とした古墳を研究している。

前方後円墳、円墳、方墳など多様な形状、大小さまざまな古墳が一定の地域に集積しているところに、世界文化遺産としての価値があり、今回の審議でもその点が認められたと考えています。

**米田** 井上先生は奈良県立橿原考古学研究所の文化財担当職員の経験を経て、母校に教員として戻ってこられました。前職と現職の両方についてお聞かせください。

**井上** 橿原考古学研究所では、奈良県内にある遺跡の発掘調査、文化財の保存、研究に従事していました。徳田さん、十河さんと同様、大学で学んだことを生かせる専門職です。行政から大学に職場が変わり、「大学教員の仕事とは」と問われますと、教育と研究ということになります。具体的には、後進を育成することが一番の責務だと思っています。文化財に携わる職場で活躍する卒業生を、一人でも多く輩出できるように頑張っています。

◆「世界文化遺産 百舌鳥・古市古墳群」の価値と魅力

**米田** 百舌鳥・古市古墳群は、2017年に国内の推薦候補となり、今回世界文化遺産への登録が決定しました。世界文化遺産としての百舌鳥・古市古墳群の魅力について、長くご担当されている十河さん、教えてください。

**十河** 百舌鳥・古市古墳群は、国内最大規模を誇る仁徳天皇陵古墳をはじめ、国内有数の大型前方後円墳を多数含んでいることが、他の古墳群にはない特徴だと思います。そのスケールの大きさをまずご覧いただきたいです。その一方で、直径や一辺の長さが20mにも満たない円墳や方墳を含んでいることにも注目いただければと思います。前方後円墳、円墳、方墳など多様な形状、大小さまざまな古墳が一定の地域に集積しているところに、世界文化遺産としての価値があり、今回の審議でもその点が認められたと考えています。

また、百舌鳥・古市古墳群は、都市化が進む中で、現代まで多くの古墳が守り伝えられてきたところにも特徴があります。住宅がすぐ近くにまで迫りながらも、地域の人々と共存し、季節の樹々や花々に彩られる古墳の姿を、ぜひご覧いただきたいと思っています。

陵墓という性格と世界文化遺産としての価値という両方の側面を、日本の方だけでなく、世界の皆さんにもご理解いただけるように、今後一層、努力していかなければならないと思っています。



**徳田 誠志 (とくだ まさし)**  
宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査官。1962年岐阜県生まれ。89年関西大学大学院博士課程後期課程修了。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員を経て、90年宮内庁書陵部陵墓課に入庁。古墳時代陵墓の調査・研究に従事している。特に、関西に点在する大型前方後円墳を主に担当している。

◆陵墓の本義と観光振興の両立という課題

**米田** 現在49基ある古墳のうち、29基は宮内庁が管理する陵墓です。今後どのように公開・保存していくのでしょうか？

**徳田** 宮内庁にとって陵墓とは皇室のご祖先のお墓ということになります。今年のように御代替わりのような大きな儀式がある時は、必ず両陛下がご参拝されます。その点では、今回世界文化遺産となった陵墓についても、皇室のご祖先のお墓であるという本義は尊重していかなければならないと思っています。

皆さんの古代史に対する関心の高さ、巨大な陵墓を実際に見てみたい、体感したいというお気持ちもよく分かります。陵墓という性格と世界文化遺産としての価値という両方の側面を、日本の方だけでなく、世界の皆さんにもご理解いただけるように、今後一層、努力していかなければならないと思っています。

**米田** 世界文化遺産登録にあたって、特にご苦労されたこと、また、今後の取り組みや課題について教えてください。

**徳田** 陵墓は皇室のご祖先のお墓ですので、私どもの立場としては観光にはなじまないと言わざるを得ないところがあります。

陵墓についてはいろいろなお考えがあります。もっと発掘調査を進めて、公表してほしいという方もおられますし、その一方で、観光地化することに疑問を持つ方もおられます。このように、いろいろなお考えがある中で、陵墓の本義を守りつつ、関係する機関とも協議をしながら登録への業務を進めていくことは、なかなか難しい局面があったことも事実です。

**十河** 私が苦労したこととしては、ユネスコに提出する推薦書の作成があります。実は何度も何度も推敲しました。世界文化遺産への登録業務を経験された他自治体の担当者の方から事前に聞いてはいたのですが、本当に何度も書き直しました。発掘調査報告

書の執筆とは違い、古墳に接するのが初めてという外国の方に、どうすれば百舌鳥・古市古墳群の価値を伝えられるのか、試行錯誤を繰り返しました。

登録後は、世界文化遺産のうち、史跡指定されている古墳の保全管理を堺市が担っていくことになります。モニタリングを徹底して、世界文化遺産にふさわしい管理方法を、宮内庁と情報共有しながら、万全を期して実施していきたいと思っています。

世界文化遺産登録が決定し、仁徳天皇陵の拝所にはたくさんの方が来訪されています。徳田さんもおっしゃったとおり、観光と世界文化遺産の保全をどう両立していくかは、非常に大きな課題です。堺市としても、宮内庁所管の陵墓については、静安と尊厳の保持が第一だと認識しています。世界文化遺産の価値をご理解いただき、かつ陵墓への尊崇の気持ちをお持ちいただけるような観光をどう実践していくか。走りながら考え、実践していくことになりませんが、この点も宮内庁と情報共有しながら、しっかりと進めていきたいと考えています。

◆百舌鳥・古市古墳群と関西大学の深く長いつながり

**米田** 百舌鳥・古市古墳群と関西大学、特に文学部考古学研究室は文化勲章受章者である末永雅雄先生、その後を継がれた網干善教先生以降、そのつながりが連続と受け継がれてきました。百舌鳥・古市古墳群と関西大学とのつながりについて、思うところをお聞かせください。

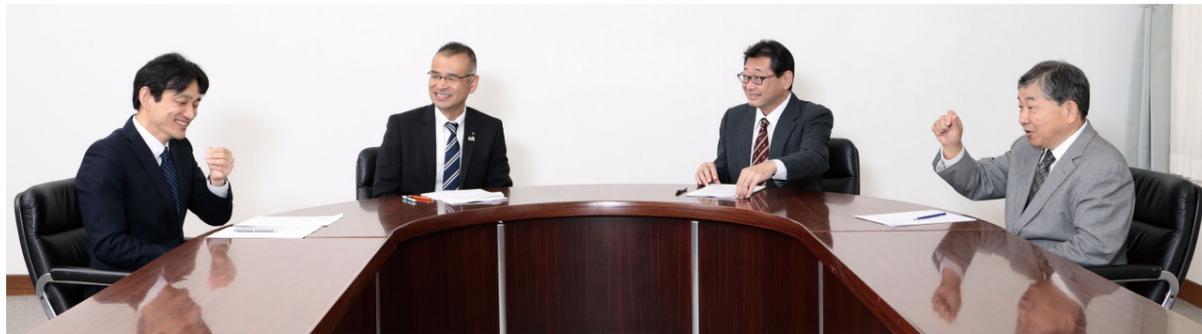
百舌鳥・古市古墳群と関西大学、特に文学部考古学研究室は文化勲章受章者である末永雅雄先生、その後を継がれた網干善教先生以降、そのつながりが連続と受け継がれてきました。



**米田 文孝 (よねだ ふみたか)**  
関西大学文学部教授・博物館長。1953年大阪府生まれ。87年関西大学大学院博士課程後期課程修了。日本学術振興会特別研究員などを経て、2002年より現職。86年から、日・印共同学術調査団調査研究員として、祇園精舎・舎衛城遺跡の発掘調査に参加。学生と寝食を共にする調査研究活動を通じ、実証的研究の継承と発展、後進の育成に力を入れている。



座談会



**徳田** 私が宮内庁に勤務するきっかけとなったのも、末永雅雄先生が宮内庁書陵部委員という学術顧問の立場におられ、そのご縁からご紹介をいただいたことでした。末永先生の後に書陵部委員を引き受けられた網干善教先生からは、百舌鳥・古市古墳群や奈良にある陵墓の調査方法、保全について、ご指導いただきました。そのような関係が関西大学と宮内庁にはあります。

**十河** 関西大学文学部考古学研究室と堺市の百舌鳥古墳群とは、特に1960年代から1970年代に関わりが多かったと思います。市民運動で保存された、いたすけ古墳の測量調査、国史跡指定の基礎資料作成のための文珠塚古墳の測量調査や乳岡古墳の発掘調査に、考古学研究室は深く関わってきました。

特に乳岡古墳の発掘調査では、埋葬施設の石棺と副葬品として大量の腕輪形石製品が出土しました。百舌鳥古墳群の形成開始期の重要な資料が得られ、古墳時代の研究になくはならない調査成果を残しています。

◆世界文化遺産登録にも役立った関西大学での学び

**米田** 徳田さんと十河さんは、卒業後に世界文化遺産登録につながるような調査研究に携わってこられました。関西大学での学びはどのように役立っていますか？

**徳田** 応神天皇陵のすぐそばに、末永先生をはじめ諸先輩が調査された盾塚、鞍塚、珠金塚古墳があります。私が考古学研究室に入った頃、それらの古墳の出土品を整理し、報告書にまとめる作業をしていました。この整理作業で初めて、古墳時代の出土品に触れ、出土品の実測図の取り方や遺物の見方などを学びました。報告書の作成にまで関わり、その報告書の中に古墳から出土した「櫛」について論文を寄稿しました。この論文が初めて活字になった私の論文で、非常に思い出深いものがあります。

関西大学にはいろいろな時代の出土品がありますので、学生の皆さんには、学部生の頃から実物を直接手にとり、図面を描いたり、写真を撮ったりする学びを続けてほしいと思います。



▲発掘風景

▲高松塚古墳発掘の様子

**十河** 私は堺市に入庁してから、百舌鳥古墳群に深く関わってきましたが、大学在学中は特にそこまで関わるような機会はありませんでした。卒業論文は兵庫県播磨地方の円筒埴輪を取り扱ったのですが、円筒埴輪製作の情報発信地である百舌鳥・古市古墳群の出土品にもっと触れて、卒業論文に挑めば良かったなと反省しました。そんなこともあって、堺市に入庁後は出土した埴輪を片っ端から収蔵庫で観察したことを懐かしく思い出します。

行政の発掘調査ではその場ですぐに判断し、掘り進めることが求められますが、学生時代の考古学研究室の発掘現場では、掘っているのか、止めるべきなのかを議論しながら進めることができました。そして、宿舎に帰り、その日の反省会をする。考古学研究室の発掘現場はその繰り返しでした。そのように、学びながら掘り進めることを許してもらえたことは、私にとってたいへん貴重な経験だったと思います。

**徳田** 学生時代に議論を重ねてこう掘り進めた、ここは失敗した、ここは成功したといった経験を積むことが、実際、現場に入り、1人で判断しなければいけない時に役立つのだと思います。そのような経験を積むことができる伝統があるからこそ、関西大学文学部考古学研究室の卒業生が、現在もあちらこちらで活躍しているのだと思います。

◆考古学を志す皆さんへ、考古学は「歩け学」だ。

**米田** 考古学を学ぶ学生に何かアドバイスはありますか？

**徳田** 考古学は英語で「archaeology」と言います。考古学では、それをもじって「歩け学」だとよく言います。とにかく自分の足で実際に遺跡に行き、自分の目で遺物を見るのが非常に大切です。

網干先生は「徳田君はその遺跡へ行ったのか、遺物を見たのか」と質問され、まだその遺跡には行っていないと言うと、「そこには知人がいるから紹介しておく」と、名刺の裏に「徳田君をよろしく」と書いてくださいました。関西大学の卒業生は至る所にいます。諸先輩が後輩の学びを助けるという、関西大学にはそのような土壌があります。

**十河** 発掘調査はチームです仕事です。また、考古学に限らず、地方公共団体における文化財行政は、地域の方々のご協力なしでは進めていくことはできません。その点においても、コミュニケーション能力を磨くことが必要だと思います。

**井上** 大学で歴史学や考古学を学ぶことは本当に楽しいことです。関西大学の考古学研究室や博物館には、百舌鳥・古市古墳群の関連資料をはじめ、多くの資料を所蔵しており、学修・研究環境として非常に恵まれています。考古学、文化遺産学に少しでも興味がありましたら、気軽に考古学研究室を訪ねてください。

百舌鳥・古市古墳群の調査研究と関西大学文学部考古学研究室

日本の古墳時代(およそ3世紀中頃から6世紀末)に、土を盛って作られた墓(=古墳)が多く造営され、百舌鳥地域(現在の大阪府堺市)、古市地域(現在の大阪府羽曳野市、藤井寺市)には4世紀後半から5世紀代にかけて巨大な前方後円墳が多く築かれた。

これらの古墳は江戸時代末期頃から、陵墓(天皇、皇后をはじめとする皇室のお墓)の探索に伴い、当時の学者にも注目され、古墳の大きさや伝承から皇室のお墓と考えられていた。明治時代に入り、多くの古墳が当時の宮内省の管理下となり、その他の古墳も民間地にあつたため、戦前までは本格的な学術調査が困難であった。何よりも、立ち入りが制限されていた古墳があまりにも大きく、その全容を知ることは不可能であった。



▲末永雅雄教授による大山古墳(仁徳天皇陵、百舌鳥古墳群)航空写真調査(1955年頃)

1950年代

●1952年……末永雅雄(1897～1991)が関西大学文学部教授(のちに名誉教授)に着任したのち考古学研究室を開設。戦後禁止されていた航空機の民間利用が解禁されると、末永教授が航空写真撮影という手法で観察・調査し、測量地図との対比研究を始めた。その結果、地上からでは分かりづらい古墳の選地や相互の関係、巨大古墳には周濠の外側に周庭帯があることを明らかにした。



(左)盾塚古墳(古市古墳群)の発掘(1955年) / (右)津堂城山古墳(古市古墳群)の航空写真調査(1958年頃)

●1955年……古市古墳群の盾塚古墳、鞍塚古墳、珠金塚古墳の発掘調査実施。住宅地開発が進む中、古墳が破壊される前の学術調査により、古墳内の埋葬施設を調査した。その結果、内部施設の構造、副葬品を知ることができ、古墳の築造年代や変遷の解明につながった。

1960年代

さらに都市化、宅地化が進む中、文化財保護の意識の高まりとともに、古墳を守り保存しようとする市民と研究者の取り組みが始まり、百舌鳥・古市古墳群の価値が見直されるようになる。

●1969年……百舌鳥古墳群の文珠塚古墳、いたすけ古墳について、史跡指定資料作成のため測量調査実施。

1970年代～

●1971年……百舌鳥古墳群の定の山古墳について、前方部削平部分復原のため調査実施。  
●1972年……百舌鳥古墳群の乳岡古墳について、石棺所在の確認のため調査実施。  
●1973年……網干善教(1927～2006)が文学部教授(1967年関西大学文学部に着任。のちに名誉教授)に就任。

関西大学考古学研究室で末永雅雄教授や網干善教教授の指導を受けた卒業生が、宮内庁書陵部調査官、文化財担当者、博物館学芸員として活躍。

2019年

●2019年5月14日……ユネスコ諮問機関のイコモス(国際記念物遺跡会議)が「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産一覧表への記載を勧告。

2019年7月6日  
第43回ユネスコ世界遺産委員会で「百舌鳥・古市古墳群」の世界文化遺産登録が決定



● 特別シンポジウム

# 「世界文化遺産へのあゆみ 百舌鳥・古市古墳群と関西大学」を開催

—世界文化遺産としての価値、保全と活用などについて議論—



## Mozu-Furuichi Kofungun Ancient Tumulus Clusters

● 東京会場

### 「世界文化遺産へのあゆみ 百舌鳥・古市古墳群と関西大学」in 東京も盛況



大阪初の世界文化遺産となった「百舌鳥・古市古墳群」。その調査研究の成果や魅力をより多くの方々と共有することを目的に、7月15日に本学千里山キャンパスで開催したシンポジウム「世界



◀熱心に解説パネルを見る来場者たち

文化遺産へのあゆみ 百舌鳥・古市古墳群と関西大学」を、7月28日に東京コンベンションホール(東京都中央区)でも同内容で開催した。

当日は500人の考古学ファンが来場。夏休み中ということもあり、親子連れや学生、生徒の姿も多く見られた。会場横に展示した百舌鳥・古市古墳群に関する解説パネルの前は熱心に見入る来場者で溢れた。

7月15日、シンポジウム「世界文化遺産へのあゆみ 百舌鳥・古市古墳群と関西大学」が千里山キャンパスで開催された。

このシンポジウムは「百舌鳥・古市古墳群」が大阪初の世界文化遺産登録候補及び決定したことを受け、堺市と関西大学の地域連携事業の一環として行われたもの。冒頭、芝井敬司学長と堺市の宮前誠文化観光局局長が挨拶。芝井学長は、百舌鳥・古市古墳群の調査でも大きな役割を果たした末永雅雄名誉教授が、研究のモットーとしていた言葉“常歩無限”を引用し、「常歩でゆくりと進むことによって、限りなく、そして想像できない遠いところまで行き着くことができる。今回の世界文化遺産登録の快挙を踏まえ、関西大学もこれから歩みを止めることなく、一歩ずつ前に進みながら、研究の成果をあげていきたい。観光についても、堺市と共に力を合わせて、取り組んでいきたい」と述べた。

第一部の講演では、まず十河良和氏(堺市文化観光局世界文化遺産推進室主幹)が「百舌鳥・古市古墳群 世界文化遺産へのあゆみ」と題して、登録に至るこれまでの経過を説明した。続いて、徳田誠志氏(宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査官)が「仁徳天皇陵の保全とその調査」と題して講演。本学の末永名誉教授が取り組んだ古墳群の調査研究が今回の世界文化遺産登録につながったことや宮内庁所管の陵墓の内訳、その定義などを説明。なかでも最大の陵墓である仁徳天皇陵の調査成果や今後の保全についても宮内庁の立場から言及した。さらに、海邊博史氏(堺市文化観光局博物館学芸課主査)が「百舌鳥古墳群における巨大古墳の調査成果」と題して、御廟山古墳とニサンザイ古墳の調査に加え、百舌鳥古墳群と古市古墳群の相違点や出土物について解説した。

第二部のパネルディスカッションでは、井上主税文学部准教授が司会を務め、パネリストに徳田氏、十河氏、海邊氏の他、田中晋作氏(山口大学人文学部教授)、山田幸弘氏(藤井寺市政策企画部世界遺産推進室室長)、米田文孝文学部教授・博物館長が加わった。話題は末永名誉教授が実践した古墳群の研究手法やその成果



及び藤井寺市の石棺復原の取り組みから、百舌鳥・古市古墳群の今後の保全方法、観光との両立、街づくりとの関わりなど幅広く、活発な意見交換が繰り広げられた。

7月6日に、世界文化遺産への登録が決定したばかりということもあり、当日は600人の参加者が熱心に講演に耳を傾け、メモをとる姿が印象的であった。

#### 百舌鳥・古市古墳群の魅力を発信

#### 総合情報学部 堀雅洋研究室が映像コンテンツとマップアプリを制作

総合情報学部の堀雅洋研究室が、大阪府立近つ飛鳥博物館と共同で、同博物館に展示されている古墳築造の様子などを再現した模型をもとに4つの映像コンテンツ(「古墳の築造」「豪族居館と大王の宴」「古墳時代のものづくり」「古墳時代の暮らし」)を制作した。この映像は今回のシンポジウム開演前に上映され、来場者の好評を博した。

映像コンテンツに加え、百舌鳥・古市古墳群を構成する49基の古墳を検索して、地図上に位置を表示したり、大きさ、形状、築造時期などの詳細を確認したりできる「百舌鳥・古市古墳群マップアプリ」も開発し、2016年から公開している。



▲映像コンテンツ カバーページ

▲百舌鳥・古市古墳群マップアプリ

映像コンテンツの「古墳の築造」並びに「百舌鳥・古市古墳群マップアプリ」は英語版も制作され、日本語版とともに公開中である。

● 映像コンテンツ

百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議の公式YouTubeチャンネル「もずふるの動画チャンネル」

● 百舌鳥・古市古墳群マップアプリ

【日本語版】 <https://www.hz-kutc.net/mozu-furu/kofun/map/app>

【英語版】 <https://www.hz-kutc.net/mozu-furu/tumulus/map/app>

# LEADERS NOW!



武市 広紀—たけいち ひろき  
 ■1997年、熊本県玉名市生まれ。2019年NHK大河ドラマ「いだてん」の主人公の一人、金栗四三氏の母校・県立玉名高等学校卒。1年次より関西大学ボランティアセンターに所属し、17年11月から翌18年11月までの1年間、学生スタッフの代表を務めた。

## つながりを生む ボランティア活動

学生生活の充実をサポートする

●文学部 4年次生  
武市 広紀 さん

関西大学ボランティアセンターの学生スタッフは、教職員とともに活動している。学生スタッフが企画・運営した活動は学内外で広く認知され、年々、評価や注目度も高まっている。代表を務めた武市広紀さんは、ボランティア活動の魅力を広めるとともに、運営の改革を進めた立役者だ。

「新しいことをしたいとは思っていましたが、そこまで乗り気ではなかったんです」。1年次生の時、友達に誘われてボランティアセンターが主催する体験ツアー「淀川掃除」に参加した武市さん。当時は、ボランティアに対して「偽善的」「無償の奉仕で行わなければならない」とマイナスイメージを持っていたと言う。けれど、参加してみると学部、年齢、性別を問わず、さまざまな人たちと交流しながらの作業は楽しく、大いに刺激を受けた。地域の方からも「ありがとう」と声を掛けられ、「いい活動だな」とボランティア活動に対するイメージは一変。今度は自分が誰かにきっかけを与える立場になりたい。そう思い、学生スタッフになることを決めた。



ボランティアセンターでは、約100人の学生スタッフが5つの班に分かれてボランティアの企画・運営、コーディネートをしている。主催するボランティア体験ツアーは、清掃や地域活性化、環境保全など多種多様。「千里キャンドルロード」や「飛鳥光の回廊」などの地域連携イベントに参加した学生から「こんなに楽しい活動がボランティア?」とよく言われます。ボランティア=大変、堅そうなどというイメージが変わるきっかけになるので、私たち学生スタッフにはうれしい反応です。普段関わる機会の少ない人と人、地域がつながる場を築き、大学生活をより充実させるためのサポートができるので、やりがいは大きいです。

2年次生の時、武市さんは学生スタッフの代表に選ばれた。快諾したものの、当時在籍していた80人の学生スタッフをまとめ、企画を推進することは想像よりもはるかに難しかった。「新しい試みの多くは失敗。常に案を10個程度用意して、ダメなら次!とどンドン試しました。何より、スタッフが新しいことに前向きにチャレンジできる団体作りに励みました」と屈託なく笑う。毎週のミーティングでは、各班の活動内容や進捗を発表するようにし、アプリを使って情報共有を徹底。ボランティアの募集内容も、全員が把握できるよう工夫を重ねた。「自ら行動しなければ人を動かすことはできない」。まず自身が率先して案を出し、幹部で話し合ってみるに伝え、納得してもらうことができたなら即、実行。このスタイルは後輩にも受け継がれ、ボランティアセンター公式Instagramのアカウント作成につながったり、学生スタッフの活動場所を移転したりと、積極的な取り組みが今も進んでいる。



一方、活動で印象に残っているのは18年の「大和川大掃除」。関大生と体育会各クラブ、教職員、ミズノ株式会社が連携する500人規模の活動で、この年、6年間続けた「淀川大掃除」から活動の地を移した。これまでの活動が実を結び、淀川河川敷のゴミは減少。他の河川の美化にも取り組みたいと考えたのだ。関係者への説明、活動エリアの地理や立入不可エリアの把握、学生スタッフの配置……。準備には約5カ月を要した。「大変だったぶん、当日の達成感は格別でした。参加者も大量のゴミを見てますますやる気がでて、生き生きとした表情で作業していました」。みんなが交流している姿を見て、ボランティアの魅力が伝わったという手応えを感じながら、「幅広い層の人たちとのつながりを自ら生み出し、自身もつながることが出来たのは得難い経験。社会人になってもボランティアを見つめ、携わり、その体験をアウトプットし続けたいです」。武市さんの挑戦は、これからも続いていく。

## トレンドを通じて 時代を書く

流行から透ける真実に迫る女性記者

●株式会社朝日新聞出版アエラ編集部 記者  
福井 しほ さん —文学部2016年卒業—



福井 しほ—ふくい しほ  
 ■1993年、大阪市生まれ。私立四條畷学園高等学校卒。2016年関西大学文学部卒。同年株式会社朝日新聞出版入社。営業本部販売部、デジタル本部AERA dot.編集部を経て19年4月よりアエラ編集部配属。趣味は音楽鑑賞、読書

伝説的ギャル雑誌の復刊、世界の教育現場、Instagram、Facebook、Twitter、LINEなどのSNS事情—。時代を彩るトレンドに迫り、見え隠れする人間心理と時代のニーズを記事にする福井さん。関西大学タイムスで磨いた取材力と行動力、そして感性を最大限に発揮して「時代」を追い掛け、記している。

訪日外国人でにぎわう築地市場の目と鼻の先—。アエラ編集部がある朝日新聞東京本社で「黒×赤」に身を包んだ福井さんは「東京は人が多くて、ザワザワして好きですね」と話した。庭のように慣れ親しんだ大阪屈指の商店街・千林商店街を懐かしむようにはにかんだ。入社3年目に肩書きはAERA dot.編集部記者に、4年目の2019年4月からアエラ編集部記者に。ラテン語で時代を意味する「AERA」は、平成になる前年の1988(昭和63)年5月創刊、センセーショナルなダジャレ交じりの1行コピーとともに8万部超の発行部数を誇る国内有数の週刊誌だ。



「今はSNS系のテーマが多いです。ハッシュタグ(#)検索をする時、TwitterとInstagramでは同じ「タグ」と「手繰り寄せる」を掛け合わせた言葉」手段でも文字数制限があるかないかによって使われ方が違うなど、取材を通じて初めて気付かされることも多いです」と福井さん。本筋とはそれた話をクローズアップして全体像を彩る哲学的な国語教師、一つ一つの言動を納得するまで深掘りする同級生



と出会った高校3年間で「自分の価値観を最も変えた時代」と言う。パンカな学風に憧れて入学した関西大学では、黒ペンで殴り書きしたような立て看板に引かれ、関西大学タイムスの扉をたたいた。「編集長と2年次生が1人の計2人しかいなくて、1年次生は私ともう1人の男子学生だけで……。取材、記事作成、入稿の繰り返しでした」。2014年1月に学内で開かれたソチ冬季五輪フィギュアスケート男子代表の高橋大輔選手、町田樹選手の壮行会では、予定稿(事前に準備した原稿)に当日の写真を添え、大学周辺のコピー店で印刷した「号外」を配布。一問一答の全文掲載がファンの中で話題となり、問い合わせが相次いだ。「紙面レイアウトもサイトデザインもシンプルですが、見てくれる人がいることを凄く実感しました」。五輪直後に編集長に就任すると、赤字打破を目標に掲げた。親しみやすさとお得情報満載で、1万人超に倍増させた公式Twitterのフォロワー数を交渉に用いるなど、広告営業でも手腕を発揮した。



2013年11月発行の『関西大学通信』第427号、「関大生なんでもMy記録」。18組20人の関大生が持つユニークな記録を数字でクローズアップする見開き特集に、2年次生で登場した福井さんの記録は「80人」。黒地に白の水玉(ドット)柄のワンピースに赤のカーディガン、そして黒の靴。関西大学タイムスを両手に、はにかんだ表情で「1年間で80人の取材をしてきました。文章を書くことが好きで、そのことが生かせるサークルを探していた時に『関大タイムス』と出会いました。(後略)」。6年後の今、元号は平成から令和に—。当時と変わらぬ勝負カラーに身を包み、当時とは「責任の重さが絶対的に違う」プロフェッショナルとして、トレンドから見え隠れする真実に迫り、【福井しほ】の署名入りで「時代」を記している。

■研究最前線

ヒトと動物の関係の歴史を検証

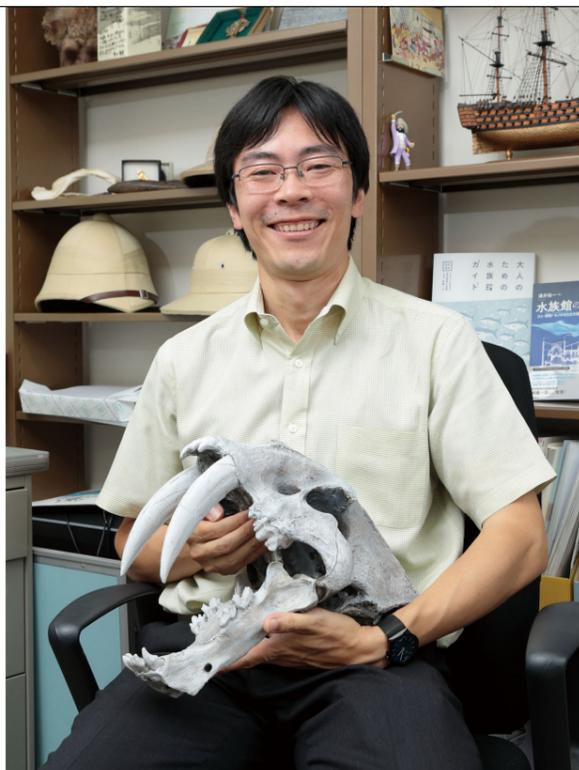
# 水族館の文化史をたどる 古代から未来まで

時代が求めるイメージを捉え、変化し続ける魔術の世界

●文学部

溝井 裕一 教授

文化共生学専修の溝井裕一教授が2018年に著した『水族館の文化史』は、古代人の水族とのかかわりから水族館発展の歴史、現状と課題やこれからの在り方まで、日本や欧米の事象を網羅し、実証的に積み重ねて考察した読み応えのある1冊。学術的にも高い評価を得て「豊穡で、楽しい、水族館研究の決定版」と評され、サントリー学芸賞の社会・風俗部門を受賞した。



水族館で、海底散歩の気分を味わう(海遊館)

海のリアルより、人々が求めるイメージに応える

——文学部で水族館の研究というのは意外ですね。

私は、もともとドイツ文学、なかでもメルヘンなど民間伝承を研究していたのですが、それらには動物がよく登場するんですね。そこから、動物と人間の関係に興味の焦点が移っていき、授業でも試みに動物園を取り上げたところ、学生の反応も良く、かつ自分自身がとても楽しかったのです。それから、その研究に本格的に取り組んで、書き上げた本が『動物園の文化史』でした。そして、次は何にしようかと選んだテーマが水族館でした。所属する文化共生学専修では、異なる国や民族のかかわりを軸に、歴史や文化を見るのが研究の基本で、その視点が水族館史の研究にも反映されています。

——『水族館の文化史』を読むと、水族館がその時代の人々のものの感じ方と、深く関連していたことがよく分かりました。

はじめは私も、水族館は魚を飼育して展示する場所という認識

でした。しかし、調べていくうちに水族館というのは、表象文化の1つ、つまり絵画や映像と同じように我々が表現したいものを表現する、そういう場所だと思えるようになりました。

魚を見ているだけでは、人はだんだん満足できなくなります。できれば、水の中にすんでいる魚と同じ世界を楽しみたいとなってくる。そうすると、水族館は人々がイメージする海の世界を、展示の中に盛り込むようになるわけです。

今だと一般的に人々が描く海のイメージは、広大で境界線がない世界。自由で美しく、清涼感にあふれ、癒やしがある、などでしょうか。そういうものを人々は見たいと思っています。

水族館の水槽はものすごく透明です。一方、本当の海は濁っていることも、汚れていることも多い。でも、来館者はそんなものを見に来るわけではありません。水槽の壁に水色のペンキが塗られているのも、海は青いものという先入観があるからです。さらに、人工サンゴなどの人工物を駆使して装飾し、本物らしい再現を行う。あの手この手を使って、水族館は人々のイメージに応えようとしてきたのです。

癒やしを求める現代人のための非日常的な展示

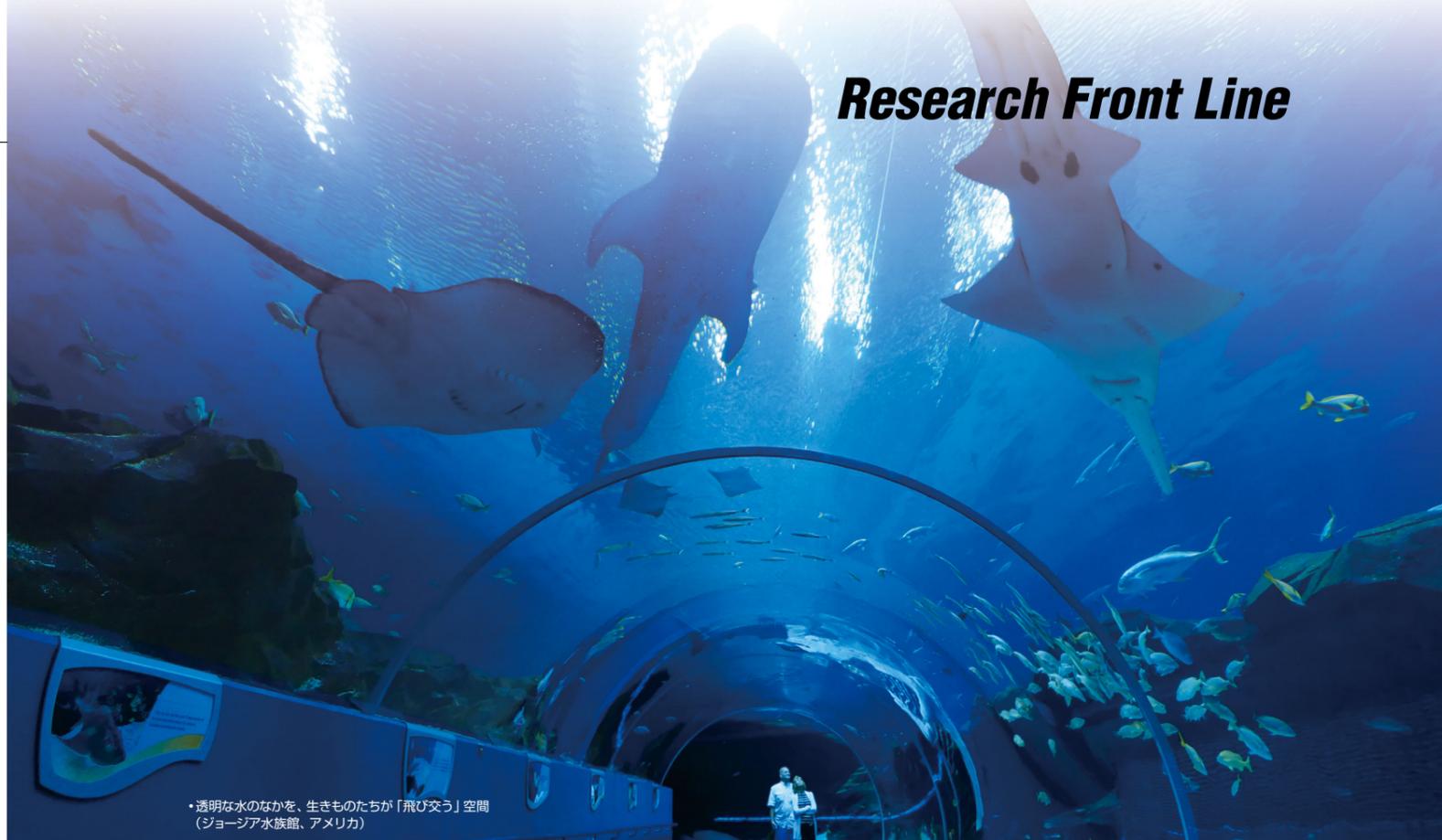
——人々の海のイメージは水族館の展示方法にどのような影響を与えますか？

時代によって海のイメージが変わると、展示の仕方も変わります。例えば、19世紀は、近代人が想像する海底世界にマッチした洞窟風の展示が流行しました。

現在の海のイメージに大きな影響を与えた人物の1人に、海のドキュメンタリー映像を撮影したジャック＝イヴ・クストーがいます。彼の映画やテレビ番組によって、それまで海の浅い部分しか知



フランス・パリ万国博覧会付属海水水族館(1867年)  
【出典】: DUCUING, François. L'Exposition universelle de 1867. Illustrée: Publication internationale autorisée par la Commission impériale. 1. Paris: Bureaux d'abonnements, 1867, p. 76.



透明な水のなかを、生きものたちが「飛び交う」空間 (ジョージア水族館、アメリカ)

## Research Front Line

らなかつた人が、深い海の世界を見ることができるようになりました。それは大変な衝撃だったと思います。

それらの映像を通して知識を蓄えた人々が、水族館に来た時に、小さな水槽で満足できるわけがありません。スキューバダイビングの苦勞もなく、海の中に入っていき気分を楽しみたいといっそう期待するようになりました。そこから、技術の発展とともに、大型水槽、ドーナツ型の回遊水槽やトンネル水槽を設置するなど、新しい展示方法が取り入れられました。それが大阪の海遊館のような新型水族館のルーツになっていきました。

——海遊館はオープン当初から大変な人気を誇っています。

そうですね。海遊館はピーター・シャマイエフというアメリカのデザイナーが造った非常に画期的な水族館の1つです。彼はいろいろな水槽を組み合わせて、高度に統合し没入感を楽しむという展示を確立した人物です。

海遊館ができたのは1990年。関西ではその少し前、1987年に須磨海浜水族園もリニューアルオープンしました。90年代はあちらこちらで、来館者の移動の仕方、水槽の形状などに工夫を凝らし、別世界への没入感にこだわった新型の水族館がいくつもできました。

別のスタイルで発展してきたものに、アメリカのシーワールドのような海洋テーマパークがあります。それらが提示しようとしているものは、海には境界線がなく、開放されたエンドレスな空間であること。そして、これが何よりも重要なポイントですが、青くて美しいことです。

人々がこのような空間を求める要因は、クストー以降の海中映像のほか、現代は都会生活に疲れている人が多いという事情もあります。ビルのオフィスで一生懸命働いて、家に帰ってきてぐったりするような毎日から離れて、たまには清涼感あふれる世界でちょっとリラックスしたいと思う人々が増えています。そういう人たちの期待に応じて、新型の水族館や海洋テーマパークはデザインされています。

未来の展示は、生きものか？ VRか？ ロボットか？

——水族館は今後どう変わっていきますか？

イルカショーの是非が問われるなど、生物の捕獲、飼育、展示方法などに対する批判が近年高まってきました。この問題についても、本の中では正面から取り上げています。水族館は今、人間と動物の共生の在り方を改めて問い直し、新しい時代に適応していかなければならない転換期を迎えていると思います。

また技術の発展によって、これからは本物なのかバーチャルリアリティ (VR) なのか、人工物なのか自然物なのか、その境目が限りなくあいまいになる、そういう時代に間違いなく差し掛かっていきます。そうすると水族館も、変わらざるを得ません。来たる時代において、水族館で展示するものは一体何になるのか。生きものなのか、それとも厳密な意味では生きものではないけれど、限りなく生きものに近いものなのか。その変化の過程が見どころになるんじゃないかと思っています。

——この研究の面白さはどういうところにありますか？

水族館は人工的な空間を、海に似せた形で、1つの閉じられた世界、宇宙を創り出す。それを私は「魔術的」と形容しています。水族館に期待されている魔術的な世界をつくり上げるための、人間の発想の豊かさや想像力に圧倒されるばかりです。それが歴史とともにどんどん変化していくのもユニークで興味深いですね。先行研究があまりなく、大変なこともありましたが、水族館研究の醍醐味の1つはここにあると思います。



研究最前線

科学の知見を防災・減災に生かす研究

# 南海トラフ地震の 予知可能性と防災

地震学者が難しいと考える予知の現実とは

● 社会安全学部  
林 能成 教授



研究室に飾られた「地球深部探査船「ちきゅう」」の模型

今後30年以内に、70～80%の確率で発生すると言われている南海トラフ沿いの巨大地震。避難や防災に役立つ予知情報を期待する人は少なくない。しかし、地震の発生時期や場所・規模を予測する科学的な手法はまだ確立されていない。社会安全学部の林能成教授は、地震学者は地震予知がいかにかに難しいと考えているかを見える化するアンケート調査を実施。大きな反響を呼んだ。

予知発表までの段階ごとの確率を調査した

— ご専門は地震学ですか？

学生時代は理学部で物理を自然現象に応用するような地球科学を学び、地震学で博士を取りました。関西大学社会安全学部に着任してからは、地震の理学的研究から出てくるさまざまなデータや知見を、実際の防災に役立たせるための策を考えるといたことをしています。

文理融合の社会安全学部で、地震の発生メカニズムを研究しているのは私だけです。ここに所属する地震防災の研究者は、土木、建築、心理学などもととの専門分野が多彩です。幅広い分野の

研究者と連携して、新しい研究を進めています。

— 世間には、南海トラフ地震などの巨大地震の予知を期待する人もいますが、実際のところ地震予知は可能ですか？

現時点では、地震の発生時期や場所・規模を高い確率で予測する、科学的に確立した手法はありません。「南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会」の平田直会長も「地震予知はとても難しいから、地震は突然来るものだと思って備えましょう」と強くおっしゃっています。でも、その一方で、地震予知は難しいということが社会の共通認識になっていない。それで、予知への期待が高まっているところがあるのでは。私は一般の人々が可能だと考える地震予知の数字と、地震学者が考えている数字との間に、大きなギャップがあると感じています。そこで昨年、地震学者を対象に南海トラフ地震の事前予測に関するアンケート調査を実施しました。

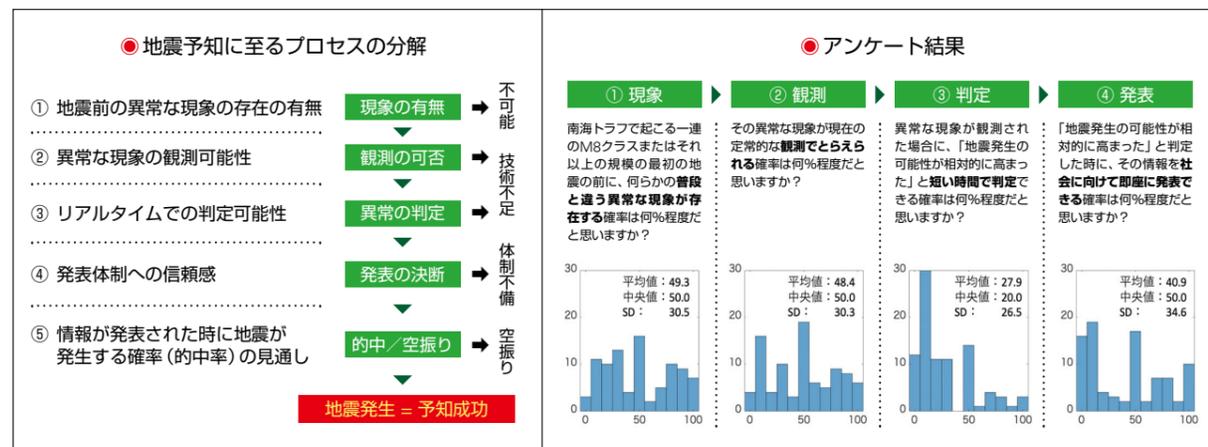
— どんなアンケートですか？

このアンケートは、社会安全学部で災害心理学が専門の元吉忠寛教授に助言を受けながら作成しました。予測情報を発表するまでのプロセスを、「1.地震前の異常現象がある」「2.異常現象を観測できる」「3.観測されたデータから短時間で異常を判定できる」「4.判定した結果を即座に社会に向けて発表できる」の4段階に分け、それぞれについて0%から100%まで、10%刻みで回答してもらう。また、地震の発生を予測する情報が出た時に地震が発生する確率、つまり的中率についても、同じように10%刻みで回答してもらうというものです。

2018年10月の日本地震学会で、理事と代議員を対象に実施し、138人中90人から回答がありました。

— アンケートの結果はどうでしたか？

4つの段階のいずれについても回答の数値の幅は広く、地震研究者の統一見解は得られませんでした。例えば、地震前の異常現象の有無についてであれば、そんな現象などないという0%から、必ずあるという100%まで幅があります。



各段階を一つ一つ見ると、例えば2の異常現象の観測ならば、平均で48.4%できるという評価になっていますが、地震予知を成功させるためには、異常な現象があって、観測、判定、発表ができること、全部成功させなければいけない。だから、各研究者の評価した予知を出せる確率を整理すると、平均値で5.8%、中央値で1.2%と極めて低い値になりました。一方、予知の的中率は平均で19.7%という結果。つまり、100回地震予知を試みても、予知情報を出せるのは5、6回程度で、そのうち、予知が当たるのは1回程度しかなく、予知情報を出してもおおむね地震が起らないだろうという評価になりました。

予知ができない前提で、被害を軽減する対策を

— 予知はやはり難しいんですね。

地震学者の多くはそう考えています。それを定量化して示そうとしたのが今回のアンケートでした。

地震はいつ起きるか分からないから、家を丈夫にするとか、危険なブロック塀を撤去するとか、地震対策はまずは目の前のことを、少しずつやっていくしかない。しかし、常日頃から、地震対策に注力ばかりでもできませんよね。地味だし、手間ばかり掛かるから、ついつい先送りしてしまう。そこに、地震予知ができるという根拠のない期待が入ると、予知が出てから考えればよいと地震への備えをしなくなり、あるいは、地震が発生した時に予知情報が出ると思っていたと、備えがなく被害を受けた時の言い訳にするといった、良くない心理的影響を及ぼすことが考えられます。

— でも以前、地震予知に取り組む組織がありましたね？

そのような組織がたくさんあって、大きな誤解を与えていました。東日本大震災以降は、確度の高い予測は困難と判断され、国も予知前提の防災対策を見直し、そういう組織も見直され、業務としての地震予知は終了しました。

それなのに、予知ができる確率がゼロではないのならば、と、今も非現実的な避難体制を考える人が出てくるわけです。それが、世の中をどんどんミスリーディングしているように見えます。予知ができる確率的中率も非常に低いということも前提



に、予知情報が出されることなく、地震が突然発生しても被害が最小限となるように、日頃から地震対策を推進することが現実的な対応だと思います。

科学者と市民のズレを埋めたい

— 一度勤務経験をお持ちですね。その経験は生かされていますか？

JR東海で5年間勤務し、新幹線の運転免許も持っています。JRでの主な仕事は、地震学で解明されたことを、新幹線に求められる運行クオリティの中で、活用するマニュアルを考えることでした。とかく大学の理学部出身の研究者は、地震のメカニズムの解明に関心が集中しがちですが、被災する側に常に意識するようになったという点では、企業での勤務を経験したことは大きかったと思います。

— 今後の抱負をお願いします。

科学者と市民の間の認識のギャップはどうして生まれるのかを明らかにすること、そのギャップをうまく解消する方法を見つけることは、研究者の側の経験がないと、なかなかできないと思います。この問題は、地震以外にも工業製品や原子力発電所などいろいろなところにあります。専門家と一般の人の間のギャップをうまく埋める方法や、世間が漠然と感じている不安を見出す指標などを考え出せたらと思っています。



梅田キャンパスで「災害と都市交通」について講演をする林教授

# Topics ■トピックス [学内情報]

## ◎「関西大学SDGsフォーラム」を開催

### 一人一人がSDGs推進の行動を

▼(左)パネルディスカッションの様子(右)全体質疑応答で質問をする経済学部・後藤健太教授ゼミの学生



6月22日、関西大学は国連が掲げる持続可能な開発目標(SDGs)に向けた取り組みの推進を目的に「関西大学SDGsフォーラム」を千里山キャンパスで開催した。

関西大学では2018年12月、学長の下に「KANDAI for SDGs推進プロジェクト」を設置。SDGsが目指す「地球上の誰一人として取り残さない」という世界規模の理念・目標に取り組んでいる。

当日は、三宅沙也加さん(文4)が日本語ボランティアや清掃などの活動経験を基にSDGs推進を訴えた。基調講演では、SDGsビジネスアワード2017で大賞を受賞したフロムファーマイスト株式会社代表取締役の阪口竜也氏が登壇。SDGsビジネスの具体的な取り組み事例を紹介するとともに「従来の経済システムの尺度では価値の低いことも、SDGsの視点に立てば価値が高いこと



がある。逆転の発想がビジネスのヒント」と持論を展開し、学生に今からできる事に取り組んでほしいと活動を促した。その後、草郷孝好教授(社会学部)や村川治彦教授(人間健康学部)らと交え、権南希教授(政策創造学部)をコーディネーターとしてパネルディスカッションを実施。「ビジネスや市民社会の在り方」「SDGsをどのように“自分ごと”として捉えていけば良いか」等をテーマに、活発な意見交換が行われた。

会場に設置されたポスターには「今日からできる私のSDGs」として参加者のアイデアや決意が記された付箋が次々と貼られ、それぞれの意欲や意識向上が伺えた。



会場設置のポスターに付箋を貼る参加者

## ◎第42回総合関関戦

### 伝統の戦いで、双方譲らず大会初の両校優勝



6月9日と14～16日の4日間、第42回総合関関戦(関関戦)が関西学院大学上ヶ原キャンパスを主会場として開催された。昨年10年ぶりの総合優勝を果たした関西大学KAISERSは、2連覇を目指して勝負に挑んだが、結果は双方譲らずの17勝17敗3分。引き分けによる両校優勝となった。

1978年に始まった関関戦は、関西大学体育会と関西学院大学体育会が良きライバルとして対戦し、親睦を深める大会として毎年開催されている。今大会のスローガンは“凌駕”。相手大学を勝敗だけで上回るのではなく、体育会全体の団結力や技量で圧倒したいという思いが込められた。

今回の結果により、関西大学の通算成績は17勝23敗1分。優勝を分け合うこととなり、選手たちは悔しさを胸にさらなる飛躍を誓った。

(写真提供)：いずれも関大スポーツ編集局

## 笑顔あふれる 市民参加型キャンパス祭

### 今年も大盛況！3キャンパス祭を開催



#### 高槻キャンパス祭2019

##### 多彩なイベントで学生と地域住民が楽しく交流

5月26日、総合情報学部祭典実行委員会の企画・運営のもと、高槻キャンパス祭2019が開催された。25回目を迎えた今年のテーマは「Can Cam～楽しさは無限大～」。さまざまな「できる」が集まる場所、それが高槻キャンパスであってほしいという学生たちの願いが込められた。

当日は、「ものづくり工房体験教室」、模擬店のゲームセンター、学生製作ゲームの研究発表、MCSによるスタジオ体験など、総合情報学部の魅力を伝える多彩な催しが行われた。

また、高槻市PRマスコットキャラクター「はにたん」と一緒に踊る「Let's はにたんダンス」、「高槻うどんギョーザ」の実演販売、フリーマーケット、本学応援団による演舞演奏、スケート教室、小学生サッカー大会、野球親善試合など、地域住民と一緒に楽しめるイベントも大好評で、キャンパスは約2,500人の来場者で終日にぎわった。



#### 堺キャンパス祭2019

##### 笑顔いっぱいのイベントで 地域とのつながりを深める

6月2日、人間健康学部祭典実行委員会を中心に、第9回となる堺キャンパス祭が開催された。今年のテーマは「どんと来い!! 堺!!」。たくさんの方に気軽に足を運んでいただき、楽しいひと時を過ごしてほしいという思いが込められた。



当日は、堺市で長く親しまれている「堺っ子体操」を全員で踊ることからスタート。フットサルやバレーボール、バドミントン等のスポーツ教室や地域社



会との連携を推進する人間健康学部らしい催しなどが多数実施された。また、物産展や緑日などの模擬店、子ども向け企画なども大いに盛り上がり、キャンパスは約1,400人の来場者の笑顔で明るく彩られた。

#### 第5回高槻ミューズキャンパス祭

##### 体験型企画で 「美味しく、楽しく」学習する

6月23日、社会安全学部祭典実行委員会が主体となり、第5回高槻ミューズキャンパス祭が開催された。今年は「地域とふれあい防災フェスタ」がテーマ。

防災に対して興味や関心を持ってもらい、イベントで得た学びを日常生活に生かしてもらいたいという学生たちの強い思いが込められた。

当日のキャンパスには、自治体による炊き出しランチをはじめ、模擬店やご当地グルメが楽しめる高槻物産展、関大中・高等部による吹奏楽コンサートなどの企画が勢揃い。身近なものを活用した防災グッズ作りや、防災かるたなどのゲーム、10歳までの防犯教室、放水体験など、社会安全学部ならではのイベントが多数開催された。オープンキャンパスも同時開催され、学生や地域住民、高校生など約3,000人が「美味しく、楽しく」安全について学んだ。



◎ 国立循環器病研究センターと国立環境研究所、関西大学が連携協定を締結

## 未来社会の「環境と健康の連関」分野における研究・人材育成・社会連携を推進



▲連携協定締結の様子。(左から)渡辺知保 国立環境研究所理事長、小川久雄 国立循環器病研究センター理事長、芝井敬司 関西大学学長

関西大学と国立循環器病研究センター、国立環境研究所は、それぞれ取り組んできた学術研究、医学研究、環境学研究を融合した「環境と健康の連関」分野における研究・人材育成・社会連携について、3機関の代表、知見等を活用し、相互に協力して進めることに合意。6月20日、包括的な基本協定を締結し、締結式と記念講演会を開催した。

本協定は、2019年度に採択された環境省環境研究総合推進費研究「気候変動の暑熱と高齢化社会の脆弱性に対する健康と環境の好循環の政策」をはじめとする共同研究の推進が目的。環境と健康の連関にかかる研究と人材育成に取り組み、未来社会の環境の保全と創造に資する成果の活用と実装を目指す。

記念講演会では、国立環境研究所の渡辺知保理事長が「Anthropocene—健康と福利のために環境を考える時代—」をテーマに、国立循環器病研究センターの小川久雄理事長が「新国立循環器病研究センターと北大阪健康医療都市(健都)」をテーマに講演。医学と環境学をリードする研究組織の長が揃う貴重な機会となり、聴講者は熱心に耳を傾けた。その後、本学環境都市工学部の北詰恵一教授が「気候変動の暑熱と高齢化社会の脆弱性に対する健康と環境の好循環の政策」について話題提供した。



▲記念講演会で挨拶をする芝井学長

◎ 法政大学・明治大学・関西大学による連携企画展を開催

## ボアソナードとその教え子たちの足跡をたどる



法政大学・明治大学・関西大学による三大学連携協力協定締結記念特別展「ボアソナードとその教え子たち」が、6月1日～7月20日、関西大学千里山キャンパスにて開催された。

本企画展は、「日本近代法の父」ボアソナード博士に学んだ若者たちが創設した大学として共通の起源を持つ3大学が、2017年9月に締結した連携協定の一環。ボアソナード博士にまつわる資料を展示し、博士の事績と、その意志を継ぎ法学普及につとめた教え子たち、そして彼らが創設した各大学の歴史を振り返った。特別展示室には、博士が実際に使用していたとされる机や直筆の手紙のレプリカなど、多



くの資料が展示されたほか、過去の箱根駅伝で使用されたユニフォームやたすきなど、各大学に関する貴重な資料も並べられた。

また、6月15日には記念シンポジウム「働くことと学ぶこと～商都大阪と関西法律学校～」も開催され、法政大学の田中優子総長、明治大学の千田亮吉副学長らを迎え、法学部の市原靖久教授、藪田貴名誉教授による基調講演や芝井敬司学長らによるパネルディスカッションも行われた。参加した聴講者は、ボアソナード博士と3大学の関係を振り返り、歴史的な観点からその意義を見つめ直した。



ボアソナードの肖像写真や直筆の手紙のレプリカが展示された特別展示室

◎ 大学×NPO法人×地域によるイベントで地域を活性化

## スポーツと文化の融合「カイザーズFactory2019」を開催



関西大学とNPO法人関西大学カイザーズクラブは8月9日、千里山キャンパス東体育館において、スポーツ&学習イベント「カイザーズFactory2019」を開催した。

スポーツと文化を融合させた当イベントは、カイザーズクラブスクール生と地域の子どもたちが対象。地域活性化を推進し、子どもたちに自主性、協調性、社会性の向上や自己発見の機会を与え、成長を促すことを目的とし、さまざまな体験や交流の場を提供した。

当日は、本学学生50人とカイザーズクラブのスクール生50人、地域の子どもたち70人が集結。午前中のスポーツイベントでは大学生と子どもたち混合の運動会やバラスポーツ体験を、午後か



▲大学生と子どもたち混合の大運動会  
◀(左)120人の子どもたちが参加した「カイザーズFactory2019」  
(右)バラスポーツ競技「ポッチャ」を体験する子どもたち

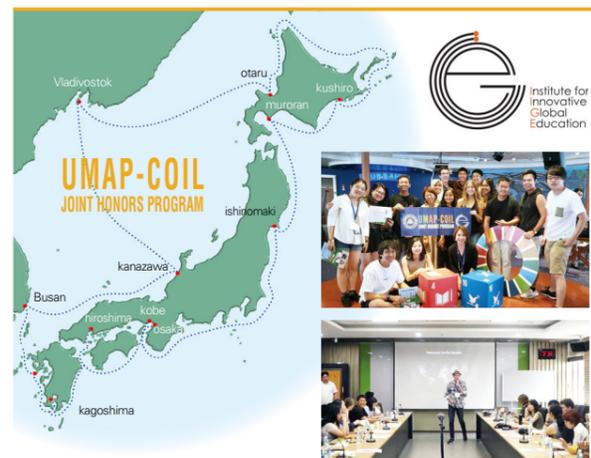
らの学習イベントでは千里山イングリッシュスクールの授業体験や夏休みの宿題質問コーナーを実施した。集まった子どもたちは、元気いっぱいイベントに参加し、大学ならではの体験を満喫していた。



▲(左)千里山イングリッシュスクール授業体験 (右)大学生による夏休みの宿題質問コーナー

◎ 「UMAP-COIL Joint Honors Program」を新規開講

## 船旅を通じ、平和・SDGsをテーマに国際理解を深める



グローバル教育イノベーション推進機構(IIGE)では、アジア太平洋大学交流機構(UMAP)共催、ピースポート協力のもと、ピースポートに乗船して世界の学生と協働学習・交流を行うプログラム「UMAP-COIL Joint Honors Program」を新たに開講した。

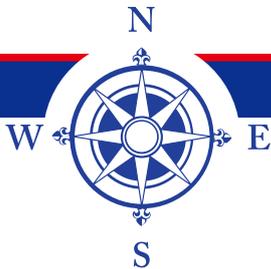
本プログラムは、国内外におけるCOIL型教育実践を促進するIIGEが、越境的国際教育の一環としてCOIL型教育をさらに発展させたもの。アジア太平洋地域のピースポートクルーズを活用し、8月4日～23日の20日間、日本各地、韓国(釜山)、ロシア(ウラジオストック)を周遊しながら、各寄港地でのフィールドワークを通じて「平和」や「SDGs(持続可能な開発目標)」等をテーマにグループ学習を実施した。

このプログラムには、関大生をはじめ、UMAPのネットワークによる各国の優秀な留学生や日本人学生の計16人が参加。乗船前の7月1日～21日には、COILセッションが実施され、オンライン交流でSDGsについての意識を高めた。続く27日～8月4日には、大阪でセミナーも開催され、日本語や日本文化を学び、SDGsに取り組む企業への訪問を通じてSDGs実装化のためのヒントを模索。乗船後は、テーマに精通したナビゲーターによる講義や、世界各国の学生との協働学習を通じて国際問題に関する理解を深め、解決策を自ら考える力をしっかりと培った。



# KANDAI NEWS

■ 関大ニュース



## 環境都市工学部の西澤英和教授が、日本建築学会賞を受賞 木造建築の耐震工法に新たな視点をもたらす



環境都市工学部の西澤英和教授が、2019年日本建築学会賞(論文)を受賞し、5月30日東京・港区の建築会館ホールで授賞式が行われた。本賞は、建築に関する学術の発展向上に寄与する優れた論文に授与されるもの。西澤教授には2012年度にも「旧日本銀行岡山支店の再生・活用に至る一連の活動」で日本建築学会賞(業績)が授与されており、今回が2度目の受賞となる。

西澤教授は、論文「耐震木造技術の近現代史」で、木造建築の耐震工法において、現代木造建築が伝統木造建築から学ぶべき事項を分析。木造の耐震技術の発展に大きな示唆を与えるとともに近代建築史に新しい視点を開き、建築学全体に多大な影響を与えたことが高く評され、今回の受賞に至った。

## データサイエンティスト育成プログラムを新設 AIを使いこなすスペシャリストを創出する

関西大学システム理工学部では、正規教育課程の一環として、本格的なAI人材を創出する「データサイエンティスト育成プログラム」を2020年度4月から開始する。

本プログラムは、企業と連携しながら、大学のデータサイエンス教育に柔軟に取り組むことのできる教育システム。まず電気電子情報工学科で導入し、20人程度の人材輩出を目指す。対象学科は順次拡大していく予定。

学生は1年次でデータサイエンティストに必要なコンピューター科学の基礎や実装のためのプログラミング技術、データサイエンスの基礎技術を習得。2、3年次でAI・IoTをモノづくりに活用するための応用技術を磨く。4年次にはプロジェクトチームによる技術開発や企業での開発インターンシップを通じて、実践的なAI・IoT技術を習得する。

一方で、AI人材の芽を育てる取り組みとして17年から高校生向けデータサイエンスセミナーを開講。これまで、武庫川女子大学附属中学校高等学校などの5校でプログラミングコース、ロボット専門コースを開講し、2年間で既に110人の生徒が受講している。大学教育の入門編として高等学校と、実践編として企業と連携したこれらの取り組みは、国内初の試みとして注目されている。

## 日本学生陸上競技個人選手権大会の男子100mで 坂井隆一郎さんが優勝!



6月7日～9日、神奈川県・Shonan BMWスタジアム平塚で開催された2019日本学生陸上競技個人選手権大会の男子100mにおいて、体育会陸上競技部の坂井隆一郎さん(人4)が優勝に輝いた。坂井さんは準決勝で自己ベストを更新し、日本学生歴代7位となる10秒12をマーク。決勝では2位と0.01秒差の大接戦を制して表彰台の中央に立ち「自分の走りができたらと思っていた。緊張より楽しさの方がありました」と声を弾ませた。

(写真提供: 関大スポーツ編集局)

## 体育会拳法部が全国大学選抜選手権大会で 女子団体準優勝、男子団体3位入賞



写真提供: 関大スポーツ編集局

6月16日、東京武道館にて開催された日本拳法第32回全国大学選抜選手権大会において、体育会拳法部が女子の部で団体準優勝、男子の部で団体3位入賞の好成績を収めた。

また、技能賞に岡本敦美さん(文4)、敢闘賞に植田甫空杜さん(法1)が選ばれ、全部員で喜びを分かち合った。

## 体育会ソフトテニス部の中崎・竹田ペアが 西日本学生選手権大会で初優勝!



西日本学生選手権大会女子の部で優勝した中崎萌さん(右)と竹田真樹さん(写真提供: 関大スポーツ編集局)

7月6日～9日に鳥取県のココ・コーラボトラーズジャパンスポーツパークで行われた西日本学生ソフトテニス選手権大会の女子ダブルスの部において、体育会ソフトテニス部の中崎萌さん(文4)・竹田真樹さん(社1)ペアが初優勝を果たした。ソフトテニス部が同大会女子の部で優勝するのは、2015年以来の快挙。

中崎さんは「優勝を目標にはしていたが、目の前のことだけを考えていたら優勝することができた」、竹田さんは「優勝できるとは思っていなかったのがうれしい」と、笑顔で語った。